

3 研究資料

障害者スポーツに対する学生の意識の変化 —「初級障害者スポーツ指導員」認定カリキュラムを通して—

高野千春

I はじめに

わが国で積極的に障害者スポーツが行われるようになったのは、1964年に東京で開催された東京パラリンピック以降であると言われる。その翌年に設立された財団法人日本障害者スポーツ協会は、日本における障害者スポーツの普及および振興を図るためにさまざまな事業を行ってきた。1985年の協会公認指導者制度に基づく「障害者スポーツ指導員」の養成事業もその1つである。公認障害者スポーツ指導員の養成講習会を実際に担っているのは、各都道府県指定都市、各県障害者スポーツ協会等の関係団体であるが、資格取得を希望する学生に便宜を図るため、1993年より学校からの申請による資格取得認定校（以下、認定校とする）制度が発足した。2011年10月現在では173の大学、短大および専門学校が認定校として登録され、障害者スポーツ指導員の登録数も21,850人となったが、わが国の障害児・者数が約744万人であることを鑑みると、未だ不足しているといわざるを得ない。

早くから sports for all の理念を掲げるドイツでは、障害者スポーツとその指導者養成に独自のシステムが作られ（福嶋ら、2006）、障害者のスポーツ参加が身近なものとなっている（安井、2008）。わが国でも50年ぶりにスポーツに関する法律が全面改正され、2011年8月に施行されたスポーツ基本法では障害者のスポーツについて明記された。このような背景の中で、「障害者スポーツ指導員」の養成事業の中核でもある認定校制度は、今後の日本における障害者スポーツの普及および振興をすすめる上で重要な役割を果たすものであり、その認定カリキュラムの充実は大きな課題といえよう。

認定カリキュラムを通して学生が障害や障害者をどう理解するか、障害者スポーツやその指導に肯定的な意識をもつか否定的な意識をもつか、実際の指導場面において大きな影響を及ぼすものと考えられる。認定校制度の発足以来、障害者スポーツに対する学生の意識についてのさまざまな調査研究が報告され（藤田、2003. 岡川、2008. 高戸ら、2008. 寺田ら、2009. 永野、2009. 保井ら、2009）、財団法人日本障害者スポーツ協会も、2009年度より「初級障害者スポーツ指導員」

基準カリキュラムの中に障害者との交流の時間を加えるなど指導者養成制度の改革を行っている。そこで本研究は、本学の「初級障害者スポーツ指導員」認定カリキュラムが学生の「障害者の能力観」「障害者スポーツ」「障害者に対するスポーツ指導」に関する意識にどのような影響を与えるかを明らかにし、カリキュラムの今後の充実を図ることを目的とした。

II 「初級障害者スポーツ指導員」 認定カリキュラム

財団法人日本障害者スポーツ協会は、「初級障害者スポーツ指導員」認定の基準カリキュラムを、福祉領域4時間、医療領域（体育学・障害者スポーツ）10時間、実技・実習領域4時間を含む18時間以上としている（表1参照）。本学ではこの基準に基づき、「発展演習Ⅲ」「スポーツ福祉政策論」「スポーツ実習（レクリエーション）」の3科目の単位取得および学外主催の現場実習への参加を、「初級障害者スポーツ指導員」資格取得の条件とした。障害者との交流の場である「現場実習」は、認定カリキュラムの中核となる「発展演習Ⅲ」の中に組み込んだ。一方、「スポーツ福祉政策論」および「スポーツ実習（レクリエーション）」は、障害者や障害者スポーツという視点も含めた包括的な授業である。

「発展演習Ⅲ」の授業概要を表2に示す。14週目のスポーツ・レクリエーション演習（現場実習）は、大学近隣の養護老人ホームに協力を得て授業時間内に全員参加で実施した。さらに学外主催の現場実習として、13週以降の時期に行われる「バリアフリーダンスサークル練習会」「バリアフリーダンスサークル定期公演」「埼玉県レクリエーション大会」「ジャパンパラリンピックアーチェリー競技大会」へのスタッフ参加またはボランティア参加を設定し、1回以上の参加を義務付けた。

III 調査方法

1. 調査時期

2010年4月～10月の期間に、質問紙による調査を3

表1 「初級障害者スポーツ指導員」基準カリキュラム

領域	講習科目	内 容	時間
福祉	障害者福祉施策と障害者スポーツ	障害者福祉施策の体系、サービス体系、今後の動向と障害者スポーツとの関連性	2
	ボランティア論	ボランティア精神と活動の基本的姿勢	2
医療・体育学・障害者スポーツ	障害者スポーツの意義と理念	障害者のスポーツの捉え方やその意義、効果	2
	安全管理	スポーツを実施する際の安全管理の基本的な項目と内容	1
	障害の理解とスポーツ	各障害の主な特性、その特性に配慮しながら安全にスポーツを実施させるために必要な最小限の知識 (身体障害(内部障害を含む)2時間以上、知的障害2時間以上、精神障害30分以上)	5
	日本障害者スポーツ協会資格認定制度	資格認定制度の概略	1
	全国障害者スポーツ大会の概要	全国障害者スポーツ大会の目的や実施内容の概略	1
実技・実習	障害に応じたスポーツの工夫・実施	実際に行われているスポーツの体験、障害に応じたの工夫	2～4
	障害者との交流	スポーツ活動をしている障害当事者の体験談を聞く、または、スポーツ活動現場に出かけ障害者とのふれあいを体験	2

表2 「発展演習Ⅲ」の授業概要

週	授業内容
1	ガイダンス
2	ボランティア論
3	障害者スポーツの意義と理念
4	安全管理
5	障害の理解とスポーツ・レクリエーション(身体障害者)
6	障害の理解とスポーツ・レクリエーション(知的障害者)
7	障害の理解とスポーツ・レクリエーション(精神障害者、高齢者)
8	さまざまな障害者スポーツ・レクリエーション(ビデオ紹介)
9	障害者スポーツ指導時の留意点および事例
10	障害者スポーツの体験(フロアバレー、シッティングバレー、風船バレー)
11	障害者スポーツを支える組織、制度、事業内容
12	全国障害者スポーツ大会・パラリンピック
13	障害者、高齢者を対象としたスポーツ・レクリエーション演習(企画、準備)
14	障害者、高齢者を対象としたスポーツ・レクリエーション演習(現場実習)
15	障害者、高齢者を対象としたスポーツ・レクリエーション演習(振り返り)
現場実習(学外)	「バリアフリーダンスサークル練習会」「バリアフリーダンスサークル定期公演」「埼玉県レクリエーション大会」「ジャパンパラリンピックアーチェリー競技大会」へのスタッフ参加またはボランティア参加

回行った。1回目は授業開始時の4月初旬(以後、講義前とする)に、2回目は「発展演習Ⅲ」の授業で設定されている現場実習に行く前の7月中旬(以後、実習前とする)に、3回目はそれぞれの現場実習が終了した10月(以後、実習後とする)に実施した。

2. 調査対象

「発展演習Ⅲ」を受講し、「初級障害者スポーツ指導員」資格取得を希望する学生のうち、2回以上の現場実習に参加し、3回の調査すべてのデータが得られた学生14名を分析対象とした。男性6名、女性8名、年齢は20～26歳であった。

3. 質問項目

障害者スポーツの授業に関する先行研究(藤田, 2003)を参考に、以下の20項目とした。

- ①身体障害者は動きに制限があるので、運動やスポーツをする場合もかなり制限されたものとなる
- ②身体障害者は気の毒だ(かわいそうな人だ)
- ③身体障害者がスポーツや運動をすることは危険である
- ④身体障害者の中には特殊な能力を持った人がいる
- ⑤身体障害者は障害のない人より能力が劣っている
- ⑥知的障害者には突然大声を出したりするなど何を考えているかわからない人が多い
- ⑦知的障害者の発育・発達の可能性は小さい
- ⑧知的障害者は世の中の役にあまり立たない
- ⑨知的障害者は運動の仕方やルールが理解できない
- ⑩知的障害者がスポーツを楽しむことは難しい
- ⑪障害者スポーツは特別なスポーツである

- ⑫障害者スポーツでも勝利することが一番大切である
- ⑬障害者スポーツは見ていても面白くない
- ⑭障害のない人のスポーツと比べて、障害者スポーツでは技術はそれほど必要とされない
- ⑮障害者スポーツは障害者のみが参加するスポーツである
- ⑯障害者のスポーツ・運動指導には不安を感じる
- ⑰障害者のスポーツ・運動指導はできれば避けたい
- ⑱障害者のスポーツ・運動指導は障害のない人のそれと比べてやり甲斐がない
- ⑲障害者にスポーツ・運動を指導するには特別な能力が必要である
- ⑳障害者のスポーツ・運動指導は難しい

項目①～⑤は身体障害者の能力観に関する質問、⑥～⑩は知的障害者の能力観に関する質問、⑪～⑮は障害者スポーツに関する質問、⑯～⑳は障害者に対する運動指導に関する質問である。いずれも5段階尺度による回答とし、「そう思う」を1点、「ややそう思う」を2点、「どちらとも言えない」を3点、「あまりそう思わない」を4点、「そう思わない」を5点として得点化した。

また、実習後の調査には自由記述欄を加えた。

4. 分析方法

統計分析はSPSS 11.5J for Windowsを使用し、一要因分散分析を適用した。

5. 倫理的配慮

調査対象者に調査の趣旨、目的を伝え、調査への協力の有無は成績等に何ら影響ないことを説明した。質問紙の提出により同意を得たものとみなした。

IV 結果と考察

1. 質問紙調査の結果

質問紙調査の結果を表3に示す。

(1) 講義前と実習前の比較

講義前と実習前の平均得点に有意な上昇が見られた項目は、①身体障害者は動きに制限があるので、運動やスポーツをする場合もかなり制限されたものとなる ($p < 0.05$)、②障害者は気の毒だ ($p < 0.001$)、③身体障害者がスポーツや運動をすることは危険である ($p < 0.05$)、④障害者の中には特殊な能力を持った人がいる ($p < 0.01$)、⑳障害者のスポーツ・運動指導は難しい ($p < 0.05$) の5項目である。13週の講義(障害者スポーツ体験を含む)が、これらの項目に対する

学生の意識に影響を与えたと考えられる。

講義において「身体をスポーツに合わせるのではなく、スポーツや運動を身体に合わせる」という Adapted Physical Activity (APA) の本来の意味を伝えることで、ルールや用具を工夫・修正すれば障害者もさまざまなスポーツや運動をすることが可能であることを理解できたと思われる。とりわけ身体障害者に関しては、工夫次第で誰でも安全にスポーツや運動を楽しむことが可能であり、障害を否定的なものではなく肯定的なものとして捉えられたことがうかがえる。また、それぞれの障害の特性や留意点を学習し、指導者の工夫次第でさまざまな運動実施が可能になることを理解できたことで、障害者のスポーツ・運動指導についてのイメージが肯定的になったと思われる。

(2) 講義前と実習後の比較

講義前と実習後の平均得点に有意な上昇が見られた項目は、前述の①身体障害者は動きに制限があるので、運動やスポーツをする場合もかなり制限されたものとなる ($p < 0.001$)、②障害者は気の毒だ ($p < 0.001$)、③身体障害者がスポーツや運動をすることは危険である ($p < 0.01$)、④身体障害者の中には特殊な能力を持った人がいる ($p < 0.01$)、⑳障害者のスポーツ・運動指導は難しい ($p < 0.001$) に加え、⑥知的障害者には突然大声を出したりするなど何を考えているかわからない人が多い ($p < 0.01$)、⑨知的障害者は運動の仕方やルールが理解できない ($p < 0.01$)、⑪障害者スポーツは特別なスポーツである ($p < 0.01$)、⑫障害者スポーツでも勝利することが一番大切である ($p < 0.05$)、⑬障害者スポーツは見ていても面白くない ($p < 0.01$)、⑮障害者スポーツは障害者のみが参加するスポーツである ($p < 0.01$)、⑯障害者のスポーツ・運動指導には不安を感じる ($p < 0.05$) の12項目である。講義(障害者スポーツ体験を含む)に加えて現場実習での体験が、これらの項目に対する学生の意識に影響を与えたと考えられる。

各障害の主な特性を学び、パラリンピックや全国障害者スポーツ大会について学習した後に、実際にスポーツや運動を楽しんでいる障害者とふれあうことで、とりわけ知的障害者に関しては、その理解しにくい行動やスポーツの楽しみ方を肯定的に捉え、積極的に評価するようになったと思われる。また、講義や現場実習を通じて、障害の有無でその方法は若干異なるが「障害者スポーツという特別なスポーツがあるわけではない」と認識すること、そしてそのために工夫されたルールを理解することで、障害者スポーツの面白さや価値観に関しても積極的な評価をするようになり、さらに

表3 質問紙調査の結果

調査項目		平均得点 (標準偏差)			F 値	有意差		
		講義前	実習前	実習後		1-2	1-3	2-3
①運動はかなり制限される	1-5 運動は制限されない	2.43 (0.85)	3.14 (1.17)	4.29 (0.83)	12.900 ***	*	***	*
②身体障害者は気の毒だ	1-5 身体障害者は気の毒でない	2.71 (1.33)	4.14 (1.10)	4.29 (0.91)	13.178 ***	***	***	
③身体障害者の運動は危険	1-5 身体障害者の運動は危険ではない	2.79 (1.53)	3.71 (0.83)	3.79 (1.05)	5.008 *	*	**	
④特殊能力の身体障害者がいる	1-5 特殊能力者はいない	2.43 (1.65)	3.64 (1.50)	3.93 (1.27)	7.808 **	**	**	
⑤身体障害者の能力は劣る	1-5 身体障害者の能力は劣らない	2.93 (1.59)	3.43 (1.34)	3.86 (1.35)	2.362			
⑥何を考えているかわからない	1-5 何を考えているか理解できる	2.57 (1.28)	3.00 (1.11)	3.57 (0.76)	6.127 **		**	**
⑦発育発達の可能性小さい	1-5 発育発達の可能性小さくない	3.29 (1.38)	3.71 (1.20)	3.79 (1.19)	1.213			
⑧知的障害者は社会貢献できない	1-5 知的障害者は社会貢献できる	4.21 (0.89)	4.43 (0.85)	4.43 (0.76)	0.626			
⑨知的障害者はルールの理解不能	1-5 知的障害者はルールの理解可能	3.00 (1.24)	3.64 (1.15)	4.29 (0.73)	7.131 **		**	
⑩知的障害者はスポーツを楽しめない	1-5 知的障害者はスポーツを楽しめる	4.57 (0.76)	4.86 (0.54)	4.93 (0.27)	2.294			
⑪障害者スポーツは特別なスポーツ	1-5 障害者スポーツは特別でない	3.64 (1.39)	4.29 (1.07)	4.71 (0.47)	4.437 *		**	
⑫障害者スポーツは勝利が一番大切	1-5 勝つことが一番とは限らない	4.50 (0.76)	4.64 (0.63)	5.00 (0.00)	3.545 *		*	
⑬障害者スポーツは見ていて面白くない	1-5 障害者スポーツは見ていて面白い	3.86 (0.95)	4.00 (1.04)	4.71 (0.47)	7.133 **		**	**
⑭障害者スポーツに高度な技術は不要	1-5 障害者スポーツにも高度な技術は必要	3.07 (1.44)	3.43 (1.83)	2.86 (1.61)	1.247			
⑮障害者のみが参加するもの	1-5 障害のない人も参加する	3.57 (1.56)	4.71 (1.07)	5.00 (0.00)	6.000 **		**	
⑯障害者スポーツ指導は不安だ	1-5 障害者スポーツ指導は不安ではない	2.21 (1.31)	2.64 (1.15)	3.50 (1.02)	4.333 *		*	**
⑰障害者スポーツ指導は避けたい	1-5 障害者スポーツ指導は避けない	3.93 (1.14)	3.86 (0.95)	4.36 (0.84)	2.507			*
⑱障害者スポーツ指導はやり甲斐がない	1-5 障害者スポーツ指導はやり甲斐がある	4.14 (0.86)	4.07 (0.92)	4.43 (0.76)	1.696			
⑲障害者スポーツ指導には特別能力必要	1-5 障害者スポーツ指導には特別能力不必要	3.07 (1.44)	3.79 (1.12)	3.71 (1.20)	1.234			
⑳障害者スポーツ指導は難しい	1-5 障害者スポーツ指導は難しくない	1.64 (0.75)	2.71 (1.44)	3.43 (1.09)	11.898 ***	*	***	

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

は、障害者スポーツの指導への不安や難しさに対する意識も低くなったと推測される。

講義前と実習前の平均得点にすでに有意な変化が見られた①身体障害者の運動は制限される、②身体障害者はかわいそうだ、③身体障害者の運動は危険だ、④特殊能力の身体障害者がいる、⑩障害者スポーツ指導は難しいの4項目では、講義前と実習後の変化ではその有意確立が小さくなり、実習後の平均得点も上昇した。13週の講義に現場実習が加わることで、これらの

項目に対する学生の意識はより確実に低くなり、障害あるいは障害者スポーツをより肯定的に捉えられるようになったことがうかがえる。

(3) 実習前と実習後の比較

実習前と実習後の平均得点に有意な上昇が見られた項目は、①身体障害者は動きに制限があるので、運動やスポーツをする場合もかなり制限されたものとなる($p < 0.05$)、⑥知的障害者には突然大声を出したりするなど何を考えているかわからない人が多い($p <$

0.01), ⑬障害者スポーツは見ていても面白くない ($p < 0.01$), ⑯障害者のスポーツ・運動指導には不安を感じる ($p < 0.01$), ⑰障害者のスポーツ・運動指導ではできれば避けたい ($p < 0.05$), の5項目である。現場実習での体験が、これらの項目に対する学生の意識に影響を与えたと考えられる。

⑥知的障害者は何を考えているかわからない, ⑬障害者スポーツは見ていて面白くない, ⑯障害者スポーツ指導は不安だ, ⑰障害者スポーツ指導は避けたいの4項目は、講義前と実習前の平均得点では有意な変化が見られなかったが、スポーツ活動現場での実習を体験することでこれらの項目に対する学生の意識が有意に低くなったことから、実習における障害者との交流の影響が大きいことがうかがえる。藤田(2003)は、見学や実践、講義だけでは障害者スポーツの指導に対する不安は取り除けないため、認定カリキュラムには実習が含まれるべきであると述べている。実習を体験することで障害者スポーツの指導に対する不安や指導は避けたいという学生の意識が低くなった今回の結果は、実習の重要性を裏付けるものとなった。

2. 自由記述の結果

「障害や障害のある人に対する見方が変わった」「いきいきと楽しそうにしている、障害を感じさせなかった」など、多くの学生がこれまで障害や障害者をネガティブに捉える傾向にあったものが、講義や現場実習を通してポジティブに捉えるようになったことを挙げている。そして「何か障害があっても、どんなスポーツでも工夫をすればできる」「一人一人の状態が違うだけで、スポーツを楽しむことに違いはないと感じた」「多少フォームが異なる点はあっても、自分の身体を最大限に活かして、通常のルールと同じように競技している姿に感動した」と、障害者スポーツのイメージが肯定的になり、「一緒に参加したい」「やりがいがあった」など、障害者スポーツの指導に対して積極的な意見もみられた。

「自分の力がこれだけなのかということがわかった」「自分の知っているスポーツの世界は狭いと感じた」など、自分自身への気づきも挙げられている。永野(2009)は、認定校において障害者との触れ合い体験後に「急速な好意的イメージへの変容」と「自分自身への気づき」の2つの変容様式が見出されたと報告しており、今回の自由記述にもこれらの変容様式がみられた。

「普段の生活の中でも、だんだん自分から障害者や高齢者に声をかけられるようになった」「今まで意識

していなかったが、周囲の障害を持っている人のことが気になる」「障害者のスポーツ大会やイベントなどのニュースや記事が目につくようになった」など、現場実習後の行動や興味が積極的になったことを挙げている。新出ら(2001)は、知的障害者スポーツ大会のボランティア参加者を対象とした調査で、ボランティア活動前から障害者問題に対して意識の高い者は活動後の意識への影響が強い傾向が見られたと報告している。「初級障害者スポーツ指導員」の資格取得を希望している学生というのは他の学生に比べると障害者や障害者スポーツに対する意識は高いと思われ、現場実習の体験が彼らの意識をより強くしたとも考えられる。

障害者のスポーツの導入を支援する「初級障害者スポーツ指導員」の養成に当たっては、認定カリキュラムを通して学生が障害や障害者をどう捉えるか、障害者スポーツやその指導に肯定的な意識をもつか否定的な意識をもつか、実際の指導場面において大きな影響を及ぼすものと考えられる。今回の自由記述からは、現場実習での障害者との触れ合いが、学生の障害や障害者、障害者スポーツに対するポジティブな意識に影響を与えていることが推測できる。しかし、「今後も障害者スポーツに関わりたい」という記述は1名のみで、実際に資格取得後の活動につなげていくためには、講義のみならず実習についても内容や実施方法の工夫が必要だと思われる。

文 献

- 新出昌明・大堀孝雄(2001) 知的障害者のスポーツ大会にボランティアとしてかかわることが障害者問題への意識の醸成に及ぼす影響。日本体育学会大会号, 52: 201.
- 藤田紀昭(2003) 障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究。日本福祉大学社会福祉論集, 第108号: 54-45.
- 藤田紀昭(2003) 身体障害者施設における運動・スポーツの実施状況に関する調査研究—障害者に対する運動・スポーツプログラム普及のための基礎的資料—。障害者スポーツ科学, 1: 64-72.
- 福嶋利浩・安井友康・服部直充・石岡研典(2006) 障害者スポーツ科学のEUを中心とした動向—第15回 ISAPA 報告とドイツでのスポーツセラピーの情報から—。障害者スポーツ科学, 4(1): 8-18.
- 磯繁雄(2002) 障害者スポーツの現状報告—障害者スポーツ指導員制度に注目して—。スポーツ科学, 健康科学研究, 5: 7-12.
- 永野典嗣(2009) 障害者スポーツ指導者養成における障害者との触れ合いの重要性—公認障害者スポーツ指導者資格取得認定校(保育系短大)における実践を通じた学生の課題レポートの分析から—。リハビリテーションスポーツ, 28(1): 25.

- 内閣府 (2010) 平成22年版障害者白書
- 岡川暁 (2008) 大学での障害者スポーツ指導員の養成に関する一考察 (第2報) —福祉系学部以外の場合—. リハビリテーションスポーツ, 27 (1) : 25.
- 高戸仁郎・本田春彦・植木章三 (2008) 保健福祉系大学生の障害者スポーツに対する意識の変容 (第二報). リハビリテーションスポーツ, 27 (1) : 25.
- 寺田恭子・藤田紀昭・山崎昌廣 (2008) 障害者スポーツ指導員資格に関する調査研究～大学・短期大学を中心に～. 日本体育学会大会予稿集, 59 : 270.
- 寺田恭子・藤田紀昭・山崎昌廣 (2009) 短期大学における障害者スポーツ指導員資格取得認定校の現状と課題. 名古屋短期大学研究紀要, 第47号 : 197-205.
- 安井友康 (2008) ドイツ・ベルリン市州における障害者の地域スポーツ活動. 障害者スポーツ科学, 6 (1) : 40-50.
- 保井俊英・永田隆子・田中美紀・藤原進一郎 (2003) 「障害者スポーツ指導員」資格取得者の現状について. 武庫川女子大紀要 (人文・社会科学), 51 : 49-55.
- 保井俊英・永田隆子・濱屋桃子・三上真二 (2009) 「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて (2) —2年分の調査から—. 武庫川女子大紀要 (人文・社会科学), 57 : 75-81.
- 財団法人日本障害者スポーツ協会 (2009) 障害者スポーツ指導教本 (初級・中級)
- 財団法人日本障害者スポーツ協会 (2011) 公認障害者スポーツ指導員資格取得認定校特別研修会資料